

# 全教員指導、提出免除などで 自学ノートの質に踏み込む

## 秋田県 大仙市立協和中学校

協和中学校では自学ノートのチェックを学級担任だけでなく、管理職や部活動顧問を含めた全校体制で行い、家庭学習の質を高めようとしている。2013年度からは、定期考査の上位者などに対して提出を免除する制度を行い、「やらされる勉強」から「主体的な学び」への転換も図っている。

### 「ヒトベンノート」の工夫①

#### 管理職も含めた全校体制で 自学ノートをチェック

大仙市立協和中学校では、生徒の家庭学習を促すために自学ノート「ヒトベンノート」を毎日2ページ課している。学習内容は、生徒自身で考えるため、漢字や英単語の反復練習、重要語句や教科書の要点まとめなど、生徒によってさまざまだ。ノートは翌朝に提出し、「字が乱雑でないか」「漢字や単語に間違いはないか」「簡単な問題にばかり取り組んでいないか」などを教員が確認し、コメント

や押印をして、当日中に返却する（写真1）。同校では、生徒に自ら学ぶ学習を促すと共に、知識が身に付いているかどうかにも徹底的にこだわり、「ヒトベンノート」の取り組みにさまざまな工夫をしている。

まず、ノートのチェックは、学級担任だけでなく、学校全体で行っている。月曜は学級担任以外の学年団の教員、火・金曜は学級担任、水曜は部活動顧問、木曜は校長・教頭・教務主任の持ち回り制だ。学校全体でのチェック体制としたのは2011年度からだ。3学年主任の佐々木知子先生は、持ち

### School Data

◎1975（昭和50）年に開校。2006年度に文部科学省の「キャリア教育実践プロジェクト」指定校となって以降、キャリア教育に力を入れる。更に、地域防災ボランティア、介護施設訪問などを行い、地域との交流を深めている。



校長◎藤本竜伸先生

生徒数◎160人 学級数◎7学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒019-2411 秋田県大仙市協和境字岸館90

TEL◎018-892-3025

URL◎<http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~ky-kyoutyu/>

公開研究会◎未定

回り制の意義を次のように説明する。

「自分の担当以外の教科は、その中身を深く見ることまでなかなか出来ません。学習の質にまで踏み込んだ指導をするために、月曜は学級担任、火曜は国語科担当というように、複数の教科担当が見るようにしていました。生徒も見えてくれる先生の教科に合わせて学習に取り組み、質問を書く生徒もいました」

学年団の持ち回り制に、管理職を加えたのは生徒に学習への緊張感を持たせるため、部活動顧問は学習と部活動との両立を生徒・教員共に意識させるためだ。また、学級担任は生徒の生活記録ノートも毎日見るため、「ヒ

## 学びの質を高める**家庭学習指導**



**写真1** 机に積まれた「ヒトベンノート」をチェックする教員。ノートは係の生徒がまとめてカゴに入れ、その日の担当教員に持参する

トベンノート」のチェックを学年団以外にも広げ、学級担任の負担を減らすという目的もあった。特に、月曜は生活記録ノートが週末3日分にもなるため、「ヒトベンノート」は学級担任以外で見ないようにしている。

### いろいろな先生からのコメントが 生徒の学習意欲を喚起する

生徒にとっては、いろいろな先生からのコメントが学習の動機付けにもなっている。例えば、部活動顧問の場合、勉強と部活動との両立の指導を始め、日常生活の心構え、前の試合での活躍など、学級担任や管理職とは違った観点から生徒に語り掛ける内容が多いという。野球部のキャプテンを務める3年

生の男子生徒は、「顧問の先生は『力尽きてはダメだ、しっかりやれ』というように、部活動とセットでコメントしてくれることが多く、励みになっています」と話す。

顧問の教員も「部活動の前にはまず勉強」という意識が強く、「ヒトベンノート」の提出を練習参加の条件にする部もある。野球部顧問の鈴木良二先生は、次のように話す。

「中学生の自分は勉強だという話を練習中にもよくします。夏休み中でも、『ヒトベンノート』の2ページ分を提出してから練習に加わるように指導しています」

ノートの書き方が多少雑な時があっても、「昨日は練習試合だったから仕方がない」と理解を示し、それとなく励ましのコメントを書けるのも部活動顧問ならではの視点だ。

藤本竜伸校長は、日替わりでチェックする意義について、「担任だけではいつも同じようなコメントになりがちですが、複数の先生が見れば、コメントの内容も多様になり、生徒にいろいろなもの見方を示せます。更に、多くの先生に見守られている、応援されているという安心感も湧くことでしょう」と語る。他の教員のコメントを見られることは教員自身にも刺激になると、佐々木先生は言う。「他の先生が立派なコメントを書いているのを見ると、プレッシャーを感じます(笑)。でも、同じ生徒についてもさまざまな見方があることが分かり、勉強になります」



大仙市立協和中学校 校長  
**藤本竜伸** ふじもと・りゅうしん  
「微笑んでほしいけれど、まず微笑むことさ」の歌のように、望む前にまずは自分から働き掛けたい」



大仙市立協和中学校  
**佐々木知子** ささき・ともこ  
3学年主任。英語科担当。「自分自身が学習者であるという意識を常に忘れない、生徒の前に立っていたい」



大仙市立協和中学校  
**鈴木良二** すずき・りょうじ  
1学年主任。保健体育科担当。「初志貫徹」をモットーに、目標を持って成し遂げられる生徒を育てたい」

### 「ヒトベンノート」の工夫② ノート内容の個別テストで 自学の意味を問い掛ける

「ヒトベンノート」の指導は、入学直後に藤本校長が自学自習の方法を教えるところから始まる。説明後、教室で30分間、自学自習に取り組むと、藤本校長が生徒一人ひとりのノートを点検する。そして、取り組んだ内容について個別に簡単な試問をし、生徒が答えられなければもう一度ノートに取り組ませて再度試問を行う。「ヒトベンノート」の目的は、ただノートを文字で埋めるのではなく、学習内容をきちんと身に付けること、ノートではなく頭に書くことが大切だと、入学時から生徒に植え付けるためだ。

藤本校長によるノートテストは、その後も前・後期1回ずつ、1・2年生全員に対して行われる。また、日々のノートチェックでも、習得があやふやそうな場合には、給食時に教室を訪れ、問題を書いた付せんを渡し、昼休みに目の前で答えを書かせる。「挨拶」という漢字は書けるか」「徳川家康は何をした人か」など、本人のノートの内容から2、3問を出題し、不正解の場合は翌日、また本人のノートの内容から別の問題を課す(写真2)。

「部活動などで疲れていると、どうやって2ページを楽に埋めようかと考える生徒も出てきます。『ヒトベンノート』の形骸化を防ぐために、抜き打ちチェックという関門を設けているのです」(藤本校長)

校長が教室まで来てテストをするからといって、生徒たちに特別な緊張感はない。他の生徒が見守る中、生徒は一喜一憂しながら真剣に取り組むという。

### ●「ヒトベンノート」の工夫③

## もっと上を目指してほしい 成績上位者はノート提出を免除

「ヒトベンノート」は生徒の学習習慣の定着、教員の生徒把握に効果を上げているが、現状では必ずしも主体的な学習姿勢を養う取り組みにはなっていないと、藤本校長は言う。「本校のモットーは『大志行深』<sup>たいしぎょうじん</sup>です。夢や将来を描いて大志を抱き、自分で考え、行

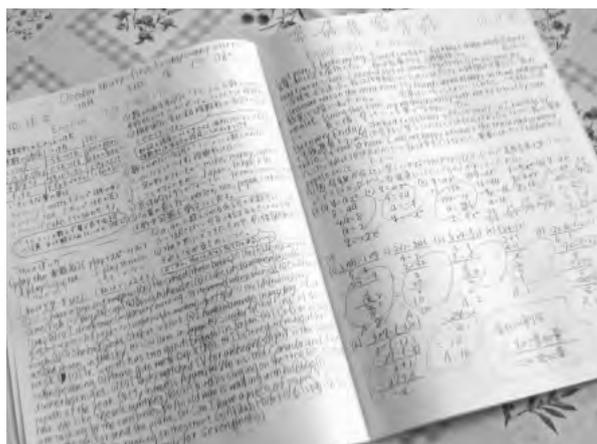


写真2 問題演習で全問正解している場合には、本当に「解けるか?」、単に反復練習をしている場合や要点をまとめている場合には、本当に「書けるか?」「覚えているか?」をノートテストで確認している

動する自立した人間を育てるのが目標です。一方、自学ノートは学習を管理するシステムで、主体的な学びとは相反します。生徒は、手取り足取り指導されることに慣れてしまうのが弱点だと思えます。更に、生徒のノートを見ていると、2ページを埋めることが目的となっているような場合もありました。また、成績上位層の生徒には、難問は時間が掛かる割にスペースが埋まらないからと、難問を敬遠する様子さえ見られていたのです

そうした状況を改善しようと13年度に始めたのが、「ヒトベンノート」の**提出免除制度**だ。これは、2・3年生を対象とし、「定期考査・実力テストの各学年の上位10人」、あるいは「5教科総合で400点以上の3年生」

が、次回のテストまでノートの提出を免除されるという制度だ。更に、中・下位層の生徒の学習意欲を高めるために、14年度前期の期末考査から、「前回テストより総合で50点以上アップした生徒」もノートの提出を免除したところ、5人の生徒が条件を達成したという。

## 自ら難問に挑戦する生徒、 免除されても提出し続ける生徒

提出免除制度によって、生徒の学習行動に変化は見られたのか。実施後、提出免除者に対して実施したアンケートによると、提出免除制度に「賛成」の生徒は、2年生では13人中7人、3年生では21人中14人だった。

2年生では賛否が半々だが、自由回答を見るとその理由が分かる。「『ヒトベンノート』がないと、つい自分に甘えてしまい、勉強をしなくなる」「ノートを出した方が気持ち引き締まる」など、ノート提出が自主学習の励みになっていく様子がうかがえる。そうした意識は学習行動にも表れている。免除後に「家庭学習時間が増えた」という2年生はゼロ(「同じ」が6人)で、「学習内容が変化した」という生徒も3人に過ぎない。藤本校長は、「学習意欲の部分で、まだ教員に支えてもらっているということが見て取れます。その甘えをなくさなければなりません」と厳しい。事実、先生からのコメントが欲しくて、免除に

## 学びの質を高める家庭学習指導

### 図 「ヒトペンノート」提出免除者のアンケート結果

#### Q.「ヒトペンノート」提出免除になって、あなたの家庭学習の内容はどのように変わりましたか？(3年生)

- ◎ 応用問題の勉強が増えた。やらされている感じが少なくなった。
- ◎ ノートをきれいに書く必要がなくなったので、考えることに集中できるようになった。
- ◎ 苦手なところにたくさん時間を掛けることが出来るので、集中できたし、勉強時間も増えた。
- ◎ 要点のまとめ→基礎問題→発展問題の順番で勉強することが増えた。

- ▲ 勉強する内容が薄くなった。
- ▲ 量が少なくなった。やらなくてもいいという考えに負けそうな時がある。

\* 同校の資料を基に編集部で作成

なっても提出し続ける生徒がいるという。

一方、受験を控えた3年生は、もう少し主体的だ。「学習時間が増えた」生徒は5人(「同じ」は13人)、「学習内容が変わった」生徒は14人に上った(図)。提出免除制度に「賛成」と答えた3年生の男子は、「難しい問題に時間を掛けて取り組んでも、2ページが埋まるとは限りません。難問を解いた後に、ノートを埋めるために漢字の書き取りをすることもありました」と語る。難問にじっくり取り組みたい生徒にとって、2ページという制約は学習意欲の妨げになっていたのである。

「漢字や単語など基礎事項の反復学習は、部活動に例えると、試合もせずに基礎練習ばかり繰り返しているようなものです。本校の生徒は応用問題を解いた経験が少ないため、

少しひねりのある問題を出されると太刀打ちできないことが往々にしてあります。難しい問題にチャレンジして経験値を高め、主体的に伸びていく生徒をより多く育てることが、提出免除制度の最大のねらいなのです」(藤本校長)

#### ● 成果と課題

### キャリア教育を充実させ 意識面からも学習意欲を高める

同校ではキャリア教育を通して学びの大切さを学ばせ、意識面からも学習意欲の向上を図っている。県内有数の進学校である秋田県立秋田高校の校長を招き、「品性の陶冶」の大切さを語ってもらったのはその一つだ。

また、3年生の夏休みに行っていた「**志望校面談**」を1年前倒しとし、13年度から2年生の夏休みに行っている。この面談で、生徒は志望校を宣言し、それを受けた学年部は生徒一人ひとりの成績と志望校のすり合わせを行い、合格可能性を検討する。志望に対して学力がまだ十分でない生徒もいるが、第1志望を諦めさせることなく、目標達成に向けて何をすべきかアドバイスを。逆に、合格圏の生徒には更に上を目指すよう発破をかける。「早めに志望校を宣言させれば、それだけ早く受験が現実味を帯びてきます。単なるあこがれではなく、現実の目標を持たせることで学びへの意欲を高めたいと思います」と

藤本校長はねらいを語る。

「ヒトペンノート」やキャリア教育の見直しによって、学習習慣の確立、学力向上を図りつつある協和中学校。元々、県平均に並ぶ学力のある学校だったが、13年度の秋田県の学力調査では県平均を超えた。しかし、藤本校長は「改革はまだ途上」と気を引き締める。

「目標は、『ヒトペンノート』の提出をなくして、自分で勉強する生徒を育てることです。その意味で、まだまだ成果は実感できません。中・下位層の生徒に対しても引き続き、きめ細かい指導を継続して、学力の底上げを図っていく必要があります。現在の方法でよいのかを先生方と検討しながら、主体的な学びと学力向上の両方を実現する道を探っていきたいと考えています」(藤本校長)



### 藤本校長が考える 学校マネジメント

毎年4月に経営方針を示しますが、その後は出来るだけ「何も足さない、何も引かない」を心掛けています。校長のぶれない一貫した姿勢が、先生方の安心感と確かな実践につながります。また、先生方から出てくるアイデアを重視して実践に取り入れています。思い付いたことは躊躇せず、「まずはやってみよう」と前向きに取り組み、その後で効果を確認する。トップダウンからボトムアップの体質に変えることでミドルリーダーが育ち、先生の居場所づくりにもなると考えています。